平成二十八年六月十日発行
皇學館論叢第四十九巻第三号　抜刷

研究ノート

『源氏物語』六条院における明石君の特別性

土田　ひびき

皇學館論叢　第四十九巻第三号
平成二十八年六月十日

研究ノート

『源氏物語』六条院における明石君の特別性

土田　ひびき

□ 要　旨

光源氏の栄華を具現化したものとされる六条院、そしてそれを構成する四つの町に関して、明石君を女主人とする〈冬の町〉に関する記述のみが極端に少ないことの意味について検討した。

従来、六条院は、光源氏と春の町の女主人紫上を頂点する秩序のもとに成り立つ空間として捉えられてきた。しかし、①明石君や他の人物の行動パターンから、〈冬の町〉が容易に立ち入ることのできない特別な空間としてあること、②冬の町にのみ、光源氏の趣向とは一切関わらない植物が明石の君の判断で植えられていることから、六条院において、明石君は光源氏や紫上をも超越する存在であり、〈冬の町〉の記述の少なさも、そうした明石君の特別性に起因するものであると結論づけた。

□ キーワード

六条院　冬の町　行事　二つの対　端近　植物

一　はじめに

源氏物語には、六条院という建物が登場する。六条院には、主人公光源氏の妻三人（紫上、花散里、明石君）と養女一人（秋好中宮）が集められ暮らしていた。六条院が造られたのは少女巻、八月のことであった。遠くに住む恋人たちとも会いやすいようにと豪華絢爛に造られた、まさに光源氏の栄華を象徴とする建物である。

六条院は四つの町に分けられており、それぞれに四季の名前がついている。春の町の主人は紫上、夏の町は花散里、秋の町は秋好中宮、そして明石君は冬の町の主人となった。六条院を建てた際、光源氏はそれぞれの町の女主人たちの嗜好に合うように工夫を凝らし花や木を植え、池や山を整え女たちを出迎えた。

例えば、紫上が主人の春の町の造りはこのように書かれている。

南の東（＝春の町）は、山高く、春の花の木、数を尽くして植ゑ、池のさまおもしろくすぐれて、御前近き前栽、五葉、紅梅、桜、藤、山吹、岩擲躅などやうの、春のもてあそびをわざとは植ゑて、秋の前栽をば、むらむらほのかにまぜたり。

（少女③二七四頁）

このように春の町は様々な花に溢れ山や池も工夫して配置されている。まさに光源氏と紫上の住むにふさわしい華やかな町となっている。こうした趣向は、他の町にも見られるものである。

花散里が主人の夏の町は

北の東（＝夏の町）は、涼しげなる泉ありて、夏の蔭によれり。前近き前栽、呉竹、下風涼しかるべく、木高き森のやうなる木ども木深くおもしろく、山里めきて、卯の花の垣根ことさらにしわたして、昔おぼゆる花橘、撫子、薔薇、苦丹などやうの、花のくさぐさを植ゑて、春秋の木草、そのなかにうちまぜたり。東面は、分けて馬場の大殿つくり、埒結ひて、五月の御遊び所にて、水のほとりに菖蒲植ゑしげらせて、向ひに御厩して、世になき上馬どもをととのへ立てさせたまへり。

（少女③二七四～五頁）

秋好中宮が主人の秋の町に関しても、

中宮の御町（＝秋の町）をば、もとの山に、紅葉の色濃かるべき植木どもを植ゑ、泉の水遠くすましやり、水の音まさるべき巌立て加へ、滝おとして、秋の野をはるかに作りたる、そのころにあひて、さかりに咲き乱れたり。嵯峨の大井のわたりの野山、無徳にけおされたる秋なり。

（少女③二七四頁）

とある。これらの町も光源氏の思う通りそれぞれの趣味に合わせ工夫が凝らされた、いかにも華やかな造りであることがわかる。

『源氏物語』六条院における明石君の特別性（土田）

そんな中、唯一そうした華やかな町々とは趣向の異なる町がある。それが、明石君を主人とする冬の町である。

【1】西の町（＝冬の町）は、北面築き分けて、御倉町なり。隔ての垣に松の木しげく、雪をもてあそばむたよりによせたり。冬のはじめ、朝霜むすぶべき菊の籬、われは顔なる柞原、をさをさ名も知らぬ深山木どもの木深きなどを移し植ゑたり。

（少女③二七五頁）

冬の町は北面が倉、さらに植えられた名前のわかる木は二種類、花は一種類と、他の町に比べ明らかに明石君の暮らした冬の町だけが簡素で華のない造りになっている。

冬の町の特異性は、それだけにとどまらない。後で詳しく述べるが、この冬の町では、他の町では頻繁に行われているはずの華やかな行事というものが一切催されていないのである。このような他の女性たちとの処遇の差について岩坪健氏は、その中でも特に紫上と比較し「明石の君に対する光源氏の愛情も処遇も、紫の上に対するそれに優越することなど絶対にあり得ないのであった」としている[1]。

ここで素朴な疑問が浮かび上がってくる。それは、そもそもなぜ冬の町は、同じ六条院の中にありながら他の町とこれほどまでに印象が違うのか、ということである。

『源氏物語』を読んでいると、もう一つ、疑問に感じられる点がある。それは、明石君が住む冬の町に関する記述が、他の町の記述に比べて極端に少ないという点である。先にも述べたように、冬の町という空間は他の町と比べて華やかさがなく、華やかな行事といったものも開催されていない。冬の町に関する記述の少なさは、冬の町の簡素さとも関連するかのように思われるが、もしそうであるにしても、やはり記述が少ないのである。

なぜ、冬の町は、他の町に比べて印象が薄いのか。また、なぜ、冬の町は他の町に比べて記述が極端に少ないのか。それは単に冬の町が華やかでない空間であることに起因しているのか。

従来、六条院については様々な研究が行われてきた。日向一雅氏は六条院を光源氏の王権性を実現する世界だとしている[2]。また増田繁夫氏は六条院の中では紫上の圧倒的優位の秩序があり、必ずしも調和していたわけではなく、紫上は六条院で世間からも認められた北方の地位を得たとしている[3]。一方で助川幸逸郎氏は六条院は光源氏と秋好中宮母子及び明石一族の三者が連合して形成している世界だとし、明石君の六条院においての立場を非常に高いものとして位置づけている[4]。このように、従来の研究においても明石君の評価について正反対の捉え方がなされてきた。

本論文の目的は、先に挙げた二つの疑問に焦点を当て、六条

院における明石君の位置づけを明らかにすることにある。

二　冬の町に見える二つの特異性について

前節で述べたように、冬の町では華やかな行事が催されることはない。

例えば、春の町では、

弥生の二十日あまりのころほひ、春の御前（＝紫上を主人とする春の町）のありさま、常よりことに尽くしてにほふ花の色、鳥の声、ほかの里には、まだ古りぬにやと、めづらしう見え聞こゆ。山の木立、中島のわたり、色まさる苔のけしきなど、若き人々のはつかに心もとなく思ふべかめるに、唐めいたる船造らせたまひける、急ぎさうぞかせたまひて、おろし始めさせたまふ日は、雅楽寮の人召して、船の楽せらる。親王たち上達部など、あまた参りたまへり。　（胡蝶④三一頁）

とあるように、晩春であるのにもかかわらず素晴らしい庭の様子である春の町で、女房や客人にもその様子を楽しませるために行事が催されている。この行事のために、わざわざ船を造り春の町の池に浮かべ、楽器などを演奏させたのである。この行事では秋好中宮を主人とする秋の町の女房たちも招待されており、彼女たちは春の町の様子に感動し、またその他の客人たちも行事が終わってしまうのが惜しく、夜遅くまで楽器を演奏するなどして楽しんだという。このように春の町では、いかにも華やかな行事が催されていることが見てとれる。

また夏の町でも五月、夏の町の特徴でもある馬場を使い、騎射を楽しむ行事が催された。その際の夏の町の様子は、

対の御方（＝夏の町西の対に住む玉鬘）よりも、童女など物見にわたり来て、廊の戸口に、御簾青やかに掛けわたして、今めきたる裾濃の御几帳ども立てわたし、童女、下仕へなどさまよふ。菖蒲襲の袙、二藍の羅の汗衫着たる童女ぞ、西の対のなめる。好ましく馴れたる限り四人、下仕へは、棟の裾濃の裳、撫子の若葉の色したる唐衣、今日のよそひどもなり。こなたのは、濃き単襲に、撫子襲の汗衫などおほどかにて、おのおのいどみ顔なるもてなし、見所あり。　（蛍④六九頁）

とあり、この行事のために皆が様々な色の着物で着飾り、調度を整え華やかにしていた様子が伺える。

さらに、秋の町でも次のような行事が催されている。

今日は、（秋の町の主人である）中宮の御読経のはじめなりけり。やがてまかでたまはで、休み所とりつつ、日の御よそひにかへたまふ人々も多かり。障りあるは、まかでなど

もしたまふ。午の時ばかりに、皆あなたに参りたまふ。大臣の君（＝光源氏）をはじめたてまつりて、皆着きわたりたまふ。殿上人なども、残るなく参る。多くは、大臣の御勢ひにもてなされたまひて、やむごとなく、いつくしき御ありさまなり。

春の上（＝紫上）の御心ざしに、仏に花たてまつらせたまふ。鳥蝶に装束き分けたる童べ八人、容貌などことにととのへさせたまひて、鳥には、銀の花瓶に桜をさし、蝶は、金の瓶に山吹を、同じき花の房いかめしう、世になきにほひを尽くさせたまへり。（胡蝶④三七頁）

秋の町の主人である秋好中宮の読経という行事に合わせ光源氏をはじめとして、殿上人も残らず秋の町に集まったことが見てとれる。この場面でも紫上から贈られた花をはじめ、銀や金の瓶には山吹や桜の、特に素晴らしいものを選んで生けるなど、華やかに準備がなされ、行事が催されている。

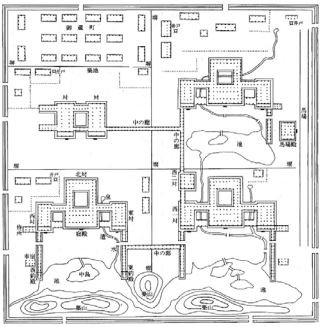
このように春の町、夏の町、秋の町では様々な行事が華やかに開催されている。しかし、冬の町では、そうした華やかな行事が催されることはないのである。

冬の町の特異性は〝華やかな行事が催されないこと〟だけではない。その建物自体に関しても、他の町の造りに比べて極めて質素なものであった。

【2】二月ばかりより、あやしく（明石姫君の）御けしき変りてなやみたまふに、御心ども騒ぐべし。陰陽師どもも、所をかへてつつしみたまふべく申しければ、（光源氏は）ほかのさし離れたらむはおぼつかなしとて、かの明石の御町（＝冬の町）の中の対にわたしたてまつりたまふ。こなたはただおほきなる対二つ、廊どもなむめぐりてありけるに、御修法の壇隙なく塗りて、いみじき験者どもつどひてのしる。（若菜上⑤九二頁）

これは、明石君の娘である明石姫君が出産のために冬の町に移る場面である。一読すればわかるように、冬の町には二つの対があり、そこに廊が張り巡らされている（【六条院復元図】[5]参照）。一見、これは豪華なもののように思えるが、実はそうではない。なぜなら、冬の町には、他の町に当たり前のように建てられている釣殿や寝殿、馬場大殿などがないからである。つまり、冬の町には対が

【六条院復元図】



※冬の町は左上。

二つあるのではない。〝二つの対しかなかった〟のである。

そもそも冬の町とは、源氏が他の町の女性たちと同じように、明石君のために特別に用意した空間であったはずである。それにもかかわらず、なぜか、冬の町だけが他の華やかな町に比べ、非常に簡素なものとなっている。このことからも、冬の町の特異性は明らかだろう。

以上、冬の町の特異性について確認してきたが、ここからが本題である。

冬の町が他の町に比べて明らかに華やかさを欠く空間であることについて述べてきたが、ここでもう一つ気になる特異性がある。それは、『源氏物語』において〝冬の町に関する記述が極端に少ない〟というものである。六条院が完成したのは、少女巻の八月のことであった。そこから、光源氏が亡くなったと記述のある匂兵部卿巻まで巻数は実に二二巻、これは全五四巻ある本作品において非常に長い期間だといえるだろう。しかし、この間に明石君を主人とする冬の町の様子が詳細に描かれるのは計六回（少女③二七五頁（＝前掲【1】）、初音④一七頁（＝後掲【4】）、野分④一三五頁（＝後掲【3】【5】）、若菜上⑤九二頁（＝前掲【2】）、若菜上⑤一〇六頁、幻⑥一三九頁）しかない。

ただ、ここで問題にしたいのは、単に〝冬の町の様子が描かれない〟ということだけではない。それ以前に、〝六条院の人々が冬の町に移動したとする記述さえほとんど認められない〟という事実なのである。

確かに、冬の町では華やかな行事が催されていない。また他の町に比べて質素な空間でもあった。そうした特別描くべきことのない空間について、なにも描かれていないというのも、ある意味当然だと言えば当然のことなのかもしれない。しかし、冬の町が描かれない理由は、おそらくそれだけではない。

考えなければならないのは、これまで述べてきた冬の町の特異性がいったい何に起因するものであるのかということである。実のところ、その答えこそが、冬の町の描写が極端に少ないことの理由につながっているのである。

三　聖なる空間としての冬の町

なぜ冬の町が描かれないのか。その理由を考えるために、まずは冬の町が描かれる場面から見ていくことにする。

【3】（明石君は）もののあはれにおぼえけるままに、箏の琴を掻きまさぐりつつ、端近うゐたまへるに、（光源氏の）御前駆追ふ声のしければ、うちとけなえばめる姿に、小袿ひきおとして、けぢめ見せたる、いといたし。（光源氏は）端のかたについゐたまひて、風の騒ぎばかりをとぶらひたま

ひて、つれなく立ち帰りたまふ、心やましげなり。

（野分④一三六頁）

野分巻、突風によって荒れてしまった六条院の各町に、光源氏がお見舞いに訪れる場面である。この場面を詳しく見ると、明石君は、彼女の庭が野分によって荒れてしまったことを悲しく思い、箏の琴を弾くこともなく手すさびにして、端近くにいたところ、光源氏の先払いをする家来たちの声がしたので、くつろいだ着物の上に小袿を羽織ることで敬意を表し光源氏を迎え入れたのはいかにもたしなみ深い様子であった。光源氏は端にちょっと座って風の騒ぎをお見舞いし、それきりで帰る様子に、明石君は意に満たぬ思いのようだ。今確認したように、この場面は明石君の日常を描いているだけのものである。ただ、ここで見逃してならないのは、「端近」にいる明石君の姿が描かれている、そのこと自体の意味なのである。

当時の女性は、他の男性に見られてはいけない存在である。そして、当人の女性たちはもちろんのこと、彼女たちの庇護者たちは、彼らに見られないように細心の注意を払いながら生活していた。このことは、次に引用する二つの場面からも容易に理解できるだろう。

《A》南の御殿（＝春の町）にも、前栽つくろはせたまひけるをりにしも、かく吹き出でて、もとあらの小萩、はしたなく待ちえたる風のけしきなり。折れ返り、露もとまるまじく吹き散らすを、（紫上は）すこし端近くて見たまふ。大臣（＝光源氏）は、姫君（＝明石姫君）の御方におはしますほどに、中将の君（＝夕霧）参りたまひて、東の渡殿の小障子の上より、妻戸のあきたる隙を、何心もなく見入れたまへるに、女房のあまた見ゆれば、立ちとまりて、音もせで見る。御屏風も、風のいたく吹きければ、押し畳み寄せたるに、見通しあらはなる廂の御座にゐたまへる人（＝紫上）、ものにまぎるべくもあらず、気高くきよらに、さとにほふここちして、春の曙の霞の間より、おもしろき樺桜の咲き乱れたるを見るここちす。…（中略）…大臣（＝光源氏）のいと気遠くはるかにもてなしたまへるは、かく見る人ただにはえ思ふまじき（紫上の）御ありさまを、いたり深き御心にて、もしかかることもやとおぼすなりけり、と思ふに、けはひ恐ろしうて立ち去るにぞ、西の御方より、（光源氏が）内の御障子引きあけてわたりたまふ。…（中略）…（夕霧が）今参れるやうにうち声づくりて、簀子のかたに歩み出でたまへれば、（光源氏は）「さればよ。あらはなりつらむ」とて、かの妻戸のあきたりけるよと、今ぞ見とがめたまふ。

（野分④一二四～五頁）

これは、【3】と同じ野分巻の一場面、紫上が庭の様子を気に

して端近くにいたところに突風が吹き、屏風がめくり上がってしまったことで、たまたま通りかかった夕霧にその姿を見られてしまうという場面である。夕霧は紫上の姿をこの場面で初めて見、その美しさに感動した。それと同時に、そのように美しく大切な人であるからこそ、紫上が他の人の目に触れぬよう細心の注意を払ってきたことを思い知り、見てしまったことを悟られまいと退出する。しかし光源氏は、退出する夕霧の様子がおかしかったことから、もしかすると紫上を見られたかもしれないと感づき焦る。

さて、今引用した《A》は、紫上が「端近」におり、その姿を夕霧に見られるというものであり、先の【3】の内容と端近くにいるという点では、大きく変わるところはない。ただ、《A》と【3】には決定的に異なる点が一つある。《A》の場合、夕霧に紫上の姿を見られたのは、彼女が「端近」にいたからではない。あくまでも、突風が吹くというトラブルが起きたことによって、はじめて彼女の姿が露わになったのである。事実、光源氏もそのことを十分に理解し、自分の妻である女性が他の男性に見られることのないように、細心の注意を払っていた。

同様の例をもう一つ挙げる。次の引用は、若菜上巻、源氏の正妻として降嫁した女三宮が、男性に姿を見られてしまうという場面である。

《B》猫は、まだよく人にもなつかぬにや、綱いと長く付きたりけるを、ものにひきかけまつはれにけるを、逃げむとひこしろふほどに、御簾のそばいとあらはに引きあけられたるを、とみにひき直す人もなし。この柱のもとにありつる人々も、心あわたたしげにて、もの懼ぢしたるけはひどもなり。

几帳の際すこし入りたるほどに、袿姿にて立ちたまへる人（＝女三宮）あり。階より西の二の間の東のそばなれば、まぎれどころもなくあらはに見入れらる。

（若菜上⑤一二七頁）

夕霧やその友人の柏木らが夏の町にて蹴鞠に興じていたところ、それが光源氏の耳に入り春の町に移動して蹴鞠をすることになる。その際、女三宮の飼っていた猫が逃げようと暴れ、繋いでいた綱が御簾に引っ掛かり部屋の中があらわになってしまう。この時女三宮は端近くに立っていたため柏木に見られてしまうのだ。

この《B》に関しても、先の《A》と同じく、他の男性たちに女三宮の姿を見られたのは、彼女が「端近」にいたという理由だけではない。猫が暴れるというトラブルによって、彼女の姿が露わになってしまったのである。

この出来事の後、女三宮に恋心を抱いた柏木は彼女に手紙を

送る。その手紙により、女三宮は自分の姿を見られてしまっていたことを知り、次のように述べる。

（女三宮は）あさましかりし御簾のつまをおぼし合はせらるるに、御面赤みて、大殿（＝光源氏）の、さばかりことのついでごとに、「大将（＝夕霧）に見えたまふな。いはけなき御ありさまなめれば、おのづからとりはづして、見たてまつるやうもありなむ」と、いましめきこえたまふをおぼし出づるに、大将の、さることのありしと語りきこえたらむ時、いかにあはめたまはむと、人の見たてまつりけむことをばおぼさで、まづ憚りきこえたまふ心のうちぞ幼かりける。

（若菜上⑤一三五頁）

右の文章で女三宮は光源氏からいつもことあるごとに他の男性に見られることがないようにと注意されていたことが見て取れる。

ここまで見てきたように、確かに【3】明石君と、《A》紫上、《B》女三宮の三人は、いずれも「端近」にいるという共通点を持っている。ただ見逃してならないのは、《A》紫上と《B》女三宮は「端近」におりながらも、その周辺には屏風や几帳が配置されており、他の男性に見られないように配慮している様子が見える。それに対して、【3】の場面で、明石君にはそうした配慮がまったく見えないという点なのである。

それだけではない。《A》紫上と《B》女三宮の場合、庇護者である光源氏もまた、彼女たちの姿を他の男性に見られないように常に気をつけていた。しかし、明石君に関しては、そうした配慮をしている様子もないのである。

他の男性に見られてはいけないはずの明石君が、あまりにも無防備に「端近」にいる。このように述べると、彼女が配慮の足りない人物であるかのように思われるかもしれない。しかし実はそうでない。明石君の場合は、彼女の配慮が足りないがために「端近」にいるのではく、他の男性に見られることはないと思っていたからこそ、端近くにいることができたのである。

そのことは、先の【3】《A》でも取り上げた野分巻の夕霧の行動を見ればわかる。

野分巻は、六条院に野分が吹き荒れた後、光源氏と夕霧が各町を訪れ見舞っている姿を描く巻である。当該巻での夕霧の行動を順に整理すると、次のようになる。

1春の町→2六条院を退出→3夏の町→4春の町→5秋の町→6夏の町→8春の町

右のように整理してみると、ある事実が浮かび上がる。

夕霧は、冬の町（＝明石君）のもとにのみ訪れていない。

夕霧は、たまたま冬の町に行かなかったのではなく、行けなかったのではないか。だからこそ光源氏が訪れた際、明石君は

安心して「端近」に立っていたのであり、そのことに対して光源氏は心配していなかったのである。

冬の町が描かれなかったのは、単に華やかさが欠けていたからではない。容易に人々が立ち入ることができない空間だったからなのである。

『源氏物語』を読んでいると、六条院において、冬の町、そして明石君は、六条院の主人であるはずの光源氏をもしのぐ存在であるかのように見える場面があることに気づく。

【4】暮れがたになるほどに、（光源氏は）明石の御方にわたりたまふ。近き渡殿の戸押しあくるより、御簾のうちの追風、なまめかしく吹き匂はして、ものよりことに気高くおぼさる。正身は見えず。いづらと見まはしたまふに、硯のあたりにぎはしく、草子ども取り散らしたるを取りつつ見たまふ。唐の綺のことことしき縁さしたる茵に、をかしげなる琴うち置き、わざとめきよしある火桶に、侍従をくゆらかして、物ごとにしめたるに、裏衣香の香のまがへる、いと艶なり。…（中略）…（光源氏が）筆さしぬらして書きすさみたまふほどに、（明石君が）ゐざり出でて、さすがにみづからのもてなしは、かしこまりおきて、めやすき用意なるを、なほ人よりは異なりとおぼす。

（初音④一七～八頁）

『源氏物語』六条院における明石君の特別性（土田）

この場面は、前節で触れた冬の町が描かれる六つの場面の一つ、光源氏が明石君のもとへ渡るという場面である。この場面では、六条院の主人光源氏が訪れたにもかかわらず、明石君や女房たちはその場にいない。光源氏は誰もいない室内で、ただ一人明石君を待っているのである。

この場面の特異性は、他の町と比較することによって、より明確になる。光源氏が六条院の町々を訪れるといった場面を探すことはそれほど難しいものではない。例えば、次の場面、

夏の御住ひ（＝花散里が住む夏の町）を見たまへば、時ならぬけにや、いと静かに見えて、わざとこのましきこともなく、あてやかに住みなしたまへるけはひ見えわたる。年月に添へて、御心の隔てもなく、あはれなる御なからひなり。今は、あながちに近やかなる御ありさまも、もてなしきこえたまはざりけり。いとむつましくありがたからむ妹背の契りばかり、聞こえかはしたまふ。御几帳隔てたれど、すこし押しやりたまへば、またさておはす。

（初音④一四～五頁）

これは、光源氏が花散里（＝夏の町）のもとを訪れる場面である。ここで彼はその町の主人である花散里によって、ごく自然に迎え入れられている。こうした一連の流れは、他の春の町、秋の町に関しても同様である。光源氏は六条院の主人として訪

れ、女たちの生活を把握する。そして彼は、六条院の主人として各町の女性たちに迎え入れられている。このこと自体は、なんら不思議なことではない。ごく自然な当たり前の光景である。

ただ、こうした一見当たり前な光景が、冬の町には見られない。光源氏が冬の町を訪れたとしても、他の町であれば当たり前のように彼を迎え入れてくれるはずの明石君の姿が、なぜか見えない。つまり、光源氏は六条院の主人でありながら、冬の町や明石君の前では六条院の主人としての扱いを受けていないのである。

冬の町の特異性というと、一見マイナスな印象を受けるかもしれない。しかし、その特異性の根本にあるのは、「聖なるもの」であった。冬の町や明石君は、一般の人々だけに留まらず、六条院の主人光源氏でさえも掌握できない空間であったのである。

冬の町の特異性として、もう一つ重要なものがある。それは、冬の町の〝植物〟に見られる特異性である。

本論冒頭でも述べたように、春・夏・秋の町々には、それぞれの季節（テーマ）にあわせた植物が植えられている。しかし、冬の町には「冬」とは関係ない植物が二種類も植えられている。

【5】童女など、をかしき袙姿うちとけて、（明石君が）心とどめ取り分き植ゑたまふ龍胆、朝顔のはひまじれる籬も、みな散り乱れたるを、とかく引き出で尋ぬるなるべし。

（野分④一三五～六頁）

右の引用に見える「龍胆」と「朝顔」は、どちらも秋に属する花であり、冬の花ではない。冬の町では位置づけとしては「冬」に割り当てられているはずでありながら、なぜか「冬」とは関係ない植物が植えられているのである。

しかも、興味深いのは次の点である。それは、それらの植物は、光源氏の趣向によって植えられたものではなく、明石君の趣向で、自らの手で植えた（「心とどめ取り分き植ゑたまふ」）ものであった点なのである。

光源氏が、自らの手で、自らの趣向に合わせて作ったとされる六条院のなかにありながら、光源氏の意向とは関係のない植物が、明石君の意思によって植えられている。この事実は、冬の町がいかに特異な空間であるかを示していると同時に、冬の町という空間のもう一つの意味を示していると考えられる。

六条院において冬の町は、光源氏の意向から独立した空間としてあった。

それこそが、冬の町の、そして明石君の本質的な姿なのであった。

物語を振り返ってみると、六条院において明石君が特異な存在であることは、入居の場面において既に示されていた。

彼岸のころほひ（春の町の主人紫上と夏の町の主人花散里が六条院に）わたりたまふ。ひとたびにと定めさせたまひしか

ど、騒がしきやうなりとて、中宮（＝秋の町の主人秋好中宮）はすこし延べさせたまふ。…（中略）…

五六日過ぎて、中宮まかでさせたまふ。

（少女③二七五～六頁）

この場面では、彼岸のころ全員が一緒に六条院に移ろうと思うものの、混乱を避けるため秋好中宮のみが五・六日間あけて移ったとしている。しかし、ここに明石君の姿は見えない。

明石君が六条院に移ったのは、他の女性たちが六条院に入った約一ヶ月後のことであった。

大井の御方（＝明石君）は、かうかたがたの御うつろひ定まりて、数ならぬ人は、いつとなくまぎらはさむとおぼして、神無月になむわたりたまひける。（少女③二七八頁）

全員で移るとしながらも明石君だけは同時に移ることはなかった。明石君ははじめから特別な存在であったのだ。この用例は、そのことを示していたのである。

四　おわりに

光源氏亡きあと、六条院は次のように変化する。

女一の宮（＝明石君の孫）は、六条の院南の町（＝春の町）の東の対を、その世の御しつらひあらためずおはしまして、朝夕に恋ひしのびきこえたまふ。二の宮（＝明石君の孫）も、同じ御殿（＝春の町）の寝殿を、時々の御休み所にしたまひて、梅壺を御曹司にしたまうて、右の大殿の中姫君を得たてまつりたまへり。…（中略）…花散里（＝夏の町の主人）と聞こえしは、東の院（＝二条院）をぞ、御処分所にてわたりたまひける。入道の宮（＝光源氏の正妻女三宮）は、三条の宮（＝女三宮が父朱雀院から伝領した邸）におはします。

（匂兵部卿⑥一六二～三頁）

春の町の主人紫上は死去し、夏の主人花散里は二条院へ、また光源氏の正妻として春の町に住んでいた女三宮もまた三条宮へと移り、六条院から次々と姿を消している。それに対して、春の町には明石君の子孫が住んでいることがわかる。それだけではない。冬の町には、今もなお明石君がいまだ住み続けていることが明らかにされるのである。

二条の院とて造り磨き、六条の院の春の御殿とて、世にのしりし玉の台も、ただ一人（＝明石君）の末のためなりけり、と見えて、明石の御方は、あまたの宮たちの御後見をしつつ、あつかひきこえたまへり。

（匂兵部卿⑥一六五頁）

光源氏亡きあとの六条院の様子はただ一人、明石君のためにあったようだとする語り手の評価からも、明石君はやはり、六

条院において特別な存在であったことがわかるのであろう。

以上、本論では明石君の六条院における他の女性とはあまりに違う冬の町の様子、またその描かれる場面の少なさに着目し六条院における明石君の位置づけについて考察してきた。最初、明石君は六条院においてその扱いなどから軽視されているように見えた。しかし実際は、特別な存在なのであり、彼女が主人である冬の町は光源氏すら踏み込むことができない空間としてあった。冬の町の様子や、生活ぶりが詳しく描かれなかったのは、そのためだったのである。

六条院において本当の優位は明石君こそにあったのだ。

※引用の本文は、新潮日本古典集成により、巻名・冊番号・頁数を付した。なお、引用本文中の（　）内の注記や傍線等は全て私に付したものである。

注

（1）岩坪健「明石の君の評価―中世と現代の相違―」（『源氏物語の展望2』三弥井書店　二〇〇七年）

（2）日向一雅「六条院世界の成立覚え書き―光源氏の王権性をめぐって―」（『源氏物語の探究7』風間書房　一九八二年）

（3）増田繁夫「紫上の妻としての地位―十世紀末の貴族社会の結婚・夫婦関係―」（『源氏物語の展望1』三弥井書店　一九九四年）

（4）助川幸逸郎「野分巻の季節の〈ずれ〉をめぐって―夕霧のまなざしがとらえなかったもの―」（『中古文学論攷』15　一九九四年一二月）

（5）玉上琢彌　「光る源氏の六条院復元図「第二案」」（『『源氏物語』と平安京』おうふう　一九九四年）。

なお、六条院の復元については、玉上氏以外にも池浩三「『源氏物語』の六条院―その想定平面図の根拠―」（『『源氏物語』と平安京』おうふう　一九九四年）などがあるが、冬の町に二つの対しかない点は共通している。

（つちだ　ひびき・
平成二十七年度皇學館大学文学部国文学科卒業生）

【編輯委員会注】本論文は、平成二十七年度皇學館大學人文學會奨励賞受賞論文である。